

舞踊運動の発達について

体育教室 佐分利 育 代

I はじめに

ダンスの学習内容具体化の問題は、表現形式としてのダンスの特質を明らかにしていくことで、理論的にはその手がかりを得ることができる。しかし一方、学習指導の実践の側からの確かめもまた、より直接的な解明への手がかりと客観的な裏付けを与えてくれる。

先の研究報告「即興表現にみられるダンスの技能¹」では、ダンス学習による技能の変化を4人の大学生の3回の即興表現を分析することを通して考察した。その結果、学習者の技能は、第1回目の表現では、先々回の研究報告²で想定した技能の段階のうちの最初の、「とらえられる」段階、第2回目は、「変化させられる」段階、第3回目は、「まとめられる」段階と変化していた。これらの技能の持つ特性が、各段階へ向けての具体的な学習目標として、学習内容設定のための手がかりとなるものと考えられる。すなわち、「変化させられる」段階での技能の特性—イメージの多様化、運動語彙の増化、表現時間の延長、繰り返しや追いあげ、アクセントの変化—また、「まとめられる」段階での特性—モチーフの明確化、各部分が全体としてのひとまとまりの流れになっている—に関する知識が、学習者に適確に与えられることが目標に向けての具体的な方法としてあげられる。

さてドウブラーは、表現形式としてのダンスについて、内的リズムと外的リズムが一致した時に成立するとしている³。媒体としての舞踊運動は内的リズムとの一致に向けて、探求されなければならないのだが、先の分析結果による学習者の技能の特性が、リズムの特性とよく似ていることがわかる。つまり、時間的な持続、モチーフの導入、グループ化、類似性と再帰、アクセント、流れなどである⁴。ランガーは、舞踏家の肉体はリズムに向けて準備できているとしているが、その方向はシンボル化の方向である。

このように、ダンス学習指導の方向はリズム化の方向であり、虚の实在としての力の仮象をいかに印象づけ、主題を明らかにするか、また繰り返し心的体験を深めていくかという舞踊運動探求の方向であると考えられる。

II 研究目的

ダンス学習指導は、リズム化に向けて、リズムのあらゆる要素を手がかりに進められる。リズムの要素は、表現運動の構成要因の中にある程度明確にとらえられており、客観的に教え得るものである。学習指導は、これらの要因についての知識を、リズムという目的に向けて与えながら進められる。

創作ダンスが教育にとり入れられた最初の頃の指導の参考図書のひとつに興味深い内容がある。鈴木綾子の「小学校ダンスの実際指導⁵」における指導例であるが、『おうたに合わせて、もっと上手なはちさんになりましょう』というものである。鈴木は、『リズムの踏み方に、思い思いの羽をつけてとびまわる』としながら、まずリズムに合わせて対象になることからはじめ、模倣の対象によっていろいろなリズムを持っていることに気付かせることを狙っている。ダンスが対象に内在する、あるいは主体の中に起った内的リズムの表現であることをふまえた指導として評価できる。

ダンスの学習内容についての次の問題、いつ、何を教えるかは従って、実際の学習を通して、学習者の舞踊運動がどのように変化したかを知ることによってさらに具体的な手がかりを得られると考えられる。本研究は、ダンス学習による技能の現われとしての舞踊運動の変化を、先回とは異なる対象の即興表現について考察するものである。

III 研究方法及び学習指導の経過

(1) 研究方法

県立鳥取聾学校小学部高学年の児童を対象に、昭和54年度と55年度の2回、9時間のダンス学習指導を行ない、学習前と1年目の学習の後及び2年目の学習の後に同一テーマでの即興表現を課した。学習者のうち、2年間継続してダンス学習を行なった5人の即興表現についてその変化を考察する。

㊦ 研究対象

鳥取県立鳥取聾学校小学部5年生3名、6年生2名(昭和55年度)、いずれも女子でダンス学習は54年度の学習が初めてである。

㊧ 学習指導期間、指導者、実施場所

昭和54年度・10月30日, 31日, 11月6日 指導者一小池敏子

昭和55年度・5月27日, 29日, 6月3日, 5日, 12日, 17日 指導者一佐分利育代

実施場所 鳥取県立鳥取聾学校体育館

㊨ 即興表現実施日及び実施方法

1回目・昭和54年10月25日

2回目・昭和54年11月13日

3回目・昭和55年6月24日

「木の葉と風」のテーマを、3つの異なる場面を描いた絵によって与え、好きな場面についてダンスによる即興表現を行なわせる。各場面についての作文を、即興表現実施前に書かせる。

即興表現は1回目と2回目は1人ずつ行なわせ、8mmフィルムに収録した(24コマ/sec)が、3回目は、授業の流れと時間的な制限により、6年生4人、5年生3人、4・3年生3人の3グループで表現させ8mmフィルムに収録した。表現の長さは規定しなかった。

㊩ 分析方法

8mmフィルムをエディターに映し出し、分析を行なった。分析は、先回の研究¹では、運動を時間における高さの変化と、動きのモチーフについて行なったが、今回は、モチーフを中心にその時間的变化とそれを構成する運動の要素について行うことにした。それは、高さのような表現運動の一構成要因にとらわれた分析では、運動の全体像を見失いがちであったこと、媒体として全体性を持った舞踊運動そのものについてモチーフの変化を見る方が、目的に近いと考えられること等の

理由による。

(2) 学習指導の経過

ダンスは身体の運動を通じた表現活動であり、その経験は、表現者の内的世界拡大の機会となり得る。特に、言語的発達において制限を受けている聴覚障害児にとってダンスの経験は大きな意味を持つものと考えられる。会話の手段としての手話の範囲にとどまらず、全身の運動を通しての新たな表現手段を知ることは、彼らの内的体験を深めてくれるものと期待できる。

㊦昭和54年度

いろいろなものの形や動きを全身でとらえられることを目標に3時間のダンス学習指導を行なった。⁶学習目標と内容は表1のようである。

学習者は、4年生(3名)、5年生(2名)、6年生(3名うち男子2名)の計8名である。

短時間ではあったが児童には「ダンスがおもしろい」との感想を持たすことができたようである⁷。

表1 54年度の学習目標と学習内容

		学 習 目 標	学 習 内 容
1	10月30日	好きな動物のまねができる	①歩く(どろぼうのように、あわてて、ゾウのように) ②好きな動物になる
2	10月31日	波になれる	①岸にうちよせる波になる ②岩にぶつかってくださる波、うずまく波になる
3	11月6日	汽車になれる	①おもちゃの汽車をみてまねる ②山を登る汽車になる ③山を降る汽車になる。 ④下り坂、田んぼの中、上り坂を走る3枚の汽車の絵を見て、それを続けて動く

表2 55年度の学習目標と学習内容

		学 習 目 標	学 習 内 容
1	5月27日	○伸び伸びした体の動きで形をとらえられる ○リズムを感じながら動ける	大小、たてよこ、上下について注意する 同じ速さの繰り返しによるリズムを味わう タオル、カサになって動く
2	5月29日	○全身で動きをとらえられる ○リズムを感じながら伸び伸びと動ける	速さや強さの違いによる感じの違いを味わう びっくり箱、ゴム、ふうせんになる
3	6月3日	○砂丘で出合ったことを全身の動きでとらえられる	砂丘を登る、下る、波から逃げるなど、速さの違いや、いろいろな感じを味わって動く
4	6月5日	○海の中にいるものを見つけ、全身で表現できる ○続けて踊れる	海の中の生き物をできるだけ沢山みつけ動きの違いを味わう 「海の踊り」
5	6月12日	○海の中にいるものを全身の動きでとらえ、リズムの違いを感じながら続けて踊れる	形やリズムの違う動きを、イメージを持って続けて踊る 「海の中をのぞいてみたらII」
6	6月17日	○雨の降る様子、雨の日の様子を全身の動きでとらえ、続けて踊れる	雨曇、雨、しずくなど雨の日のことを沢山みつけ続けて踊る動きを繰り返して感じを出す


①昭和55年度

リズム化を考慮し、続けられること変化させられることを目標に6時間のダンス学習指導を実施した。学習内容として、表現運動の構成要因の中から各時間とりあげ配当した。学習経過についてその目標と内容は表2に、学習活動と学習者についての指導者の所見を表3に示した。

学習者は、3年生(1名・男子)、4年生(2名、うち男子1名)、5年生(3名)、6年生(4名、うち男子2名)、計10名(うち男子4名)である。

表3 55年度学習経過

	学 習 活 動	所 見
1	<ul style="list-style-type: none"> ○体全体で、上下、たてよこ、大小など伸び縮みする ○指導者や友達が動かすタオルやカサになる 	<p>すぐにまねをした 「何という題ですか」と動きに興味を示した よく見て、柔らかくもす速くも、体全体で伸び伸び動けた 興味が持続し、次々と動けた カサよりタオルの動きがおもしろかったと言う者が8人いた</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> ○伸びる縮むをいろいろな速さで行なう ○速く伸びてゆっくり縮むものをみつけそれになって動く(びっくり箱) ○ゆっくり伸びて速く縮むものになる(ゴム) ○風船になる ○一番おもしろかったものをもう一度踊る 	<p>伸び伸び動いていた いろいろな顔や形でできた 箱に入っている時もその顔や形でできた 「ゴム」とすぐにみつけた 男子は特に敏感に縮んだ 女子は手をつないでゴムになって伸びた 縮む時、女子は集まり、男子は重なった 3度繰り返したが、その度に縮むのが上手になった 説明しているうちに、すでに体でふくらんでいる (男子2人、女子1人) 手ではずませる様子をする者や、割れる様子を体で見せる者など、様々な動きのイメージをすぐに持った ふくらむ時とはずむ時は明らかに感じを変えて動いていた は ずむ時に動きと同じリズムで発声していた(女子) びっくり箱……4人 ゴ ム ……2人 風 船 ……4人</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> ○伸びる縮むを、速さ、方向を変えて行なう ○伸びる一縮む一伸びるのように続ける ○砂や、波のイメージを持って指導者の伸びる縮むをまねする ○砂丘を登ったり降りたりする ○波、波から逃げる様子を表現する ○泳ぐ ○砂丘を登る、砂、波、泳ぐを順番にもう一度踊る 	<p>伸びる時に跳んで縮まって転がる―「砂」と教えるとそのつもりで動けた 伸びながら前進し、縮まって後にさがる―「波」とあてた すぐに登りはじめたのは男子だった 降りる時、転がり降りた 「登ったらどうするか」の発問に「海が見えます」と答えた 男子が波で女子は逃げるを行なったら追っかけ合いになった 「逃げる」をテーマにしたのが原因 はう、歩きながら、もぐる、鼻をつまんで、上方へ泳ぐ、水中めがね等全員が異なる動きをした 砂など全身で動ける題材を男子は喜ぶ 砂丘は、遠足などでよく行く所で、その分よく知っている、踊りながら再体験できたと思う</p>

	学 習 活 動	所 見
4	<p>○指導者の動きをまねして動き何の動きかあてる (こんぶ、あわ、岩)</p> <p>○わかめ、あわ、岩の他に何があるか、何があるかを発表し、まねし合う</p> <p>○続けて動く</p>	<p>お天気が良く、はしゃいでいてなかなか集中しなかったが、「わかめ」と解ってから全員が動くようになった</p> <p>3つの感じを変えて踊れた</p> <p>さめ…昨年の高等部中学部の女子の作品⁸の中に出てきた「さめ」の動きをまねしている</p> <p>ちょうちんあんこう…2人づつ光でお話できた</p> <p>カニ…男子の1人が、カニの手はチョコキキではなくキだと </p> <p>言い、全員その手でおもしろそうに踊った</p> <p>貝……女子は手の動きしかしなかったが、体全体で行なうよう注意すると、大きく閉じたり開いたりした</p> <p>人魚、おおかみ魚、カメ、いるか、たつのおとしご、フグ、エビ</p> <p>沢山知っていて、すぐに動き出す、「はい動いて」と言われてから動くのではなく、知っているものはすぐに体全体で動き出す</p> <p>指導者のまねをさせることが多いので指導者がやめるとやめやすい</p> <p>イメージだけで動きを続けさせるためには、絵などで次々に示してやる必要がある</p>
5	<p>○指導者の動きをまねる</p> <p>○「海の中をのぞいてみたらII」⁹の題で前時に出した動きの中からいくつか選び、続けて踊る</p> <p>○わかめ、岩、あわ、たつのおとしご、ちょうちんあんこう、カニ、貝、ふぐ、エビ、サメ</p> <p>○男女別に発表する</p>	<p>運動欲求を満たしてやることで、貝やエビで出してほしい動きを入れる、リズムの異なる動きを全身で行わせる</p> <p>板書し、そのあと、指し示しながら動かせたら、指導者が動かなくても動いた 字より絵で示したらもっと良かった</p> <p>続けて動けたが、ひとつひとつがもっと続いたら良い感じを変えて行うことができた</p> <p>エビでは、導入で教えた動きが男子にとり入れられた</p> <p>「あわ」の動きは、パアッと跳んだりくるくる回ったり変化させてできていた</p> <p>「わかめ」を男子4人で組んで動いた</p> <p>下半身が動けない児童が見学していたが、リズムをとらえ、上半身だけで踊ってくれた</p> <p>「貝」は個人個人違う動きでできた</p> <p>「カニ」は女子はゆっくり男子は速く動いた</p> <p>「貝」と「ふぐ」は続けて動きにくかったので、省略し、他のものを続けて動くように指示した</p>
6	<p>○指導者が動かすカサになる</p> <p>○指導者が動かすカサについた雨粒になつて動く</p> <p>○雨降りのいろいろな状態を思い出し、画用紙に色マジックで絵を描く</p> <p>○続けて何度も踊る</p>	<p>すぐに動いていた</p> <p>すぐに理解し、体全部で表現していた</p> <p>どんな雨、または雨降りの日の様子があるか発問し絵を描かせたが、色々な色を使いきれいな配色で、多くの場面を書けた</p> <p>ひとつひとつ変化させ動けていた</p> <p>タイコの伴奏も、児童達で交代でできた</p> <p>続けて踊る順序も児童達自身で決められた</p> <p>雨が上がった時と、カミナリの時では完全に違う感じを味わいながら踊っていた</p> <p>「ポツン、ポツン」降る雨では男子は声を出して行っていた</p> <p>「虹」を全員でつくっていた</p> <p>ひとつひとつの場面をもう少しじっくり踊らせるべきだった</p>

7時間目の6月24日は、1時間目と2時間目の授業の様子を撮った8mmフィルムを全員で鑑賞しその後で即興表現の撮影を行った。

IV 研究結果と考察

3回の即興表現の舞踊運動をモチーフを中心に分析したものが、図1, 2, 3である。

表現は下から上に向かって進行する。動きのモチーフはアルファベットの小文字で表わし、その変形は番号で示した。

モチーフの右側の四角は、モチーフを構成する運動である。運動のうちモチーフの柱に近い側には特徴ある腕(上体を含む)の動きを(アイウ…),次に、移動の際の脚の動きによって特徴づけられるもの(下体の運動を含む)を(あいう…),最も外側には、回転や倒れる、座るなど全身の変化に関する動きを記入した(α, β, γ …)。また、脚や腕の動きも、ダイナミックなものほど外側に置いた。アクセントと思われる部分は、運動要素の柱に黒で示した。

なお、モチーフやフレーズを示すアルファベットは、各個人の表現においてのみ同種類の運動を示す記号で、その運動の出現順につけたものである。

学習前の第1回目と3時間の学習後に行なった第2回目の即興表現に共通している点として、表現時間が短いこと、全体がひと続きになっていないこと、場所の移動が少ないことがあげられる。このことから、学習者の技能は続けて踊ることができる段階に達しておらず、対象についてのイメージを継続できないことがわかる。また、反復される運動に速さの違いがほとんどみられないことも共通している。

一方、1回目と2回目の表現の大きな違いは、アクセントが2回目では感じられたことである。アクセントは、同一運動を力強く行なったりあまり力を込めずに行なったり等動き方に区別していることや、異なる運動要素の加算的な組み合わせ、同一の運動に別の運動要素を掛け合わせによってモチーフ内の運動の速さや形が変化し力の強さに違いが出てくることによって現われている。E.N.とY.M.ではフレーズと感じられる一続きの部分があった。

1回目の表現における動きが、日常的な範囲を越えない手だけのゼスチャーであったのに対し、2回目の表現では、全身を使った拡大された舞踊運動と呼べるものになった。どの学習者の動きも腕の動きと脚の動きが確かな関連を持って行なわれている。そして、「倒れそうになって戻る」(M.N.のモチーフb)、「走って行って吹きつける」(E.N. N.D. Y.H.)のような運動の加算的内容を含むモチーフが現われたことは、対象を時間的な長さを持った動きとしてとらえ表現していることを示している。

「ふきつける」動きの要素(I)は国語の劇「北風と太陽」の練習で習得したもので、自らが発見した動きとはいえないが、この動きの要素が他の要素と組み合わせられてダンスに使われたことは意味深いと思われる。すなわち、知っている動きが持つイメージと、対象のイメージが似ていることを感じとり転用できたこと、N.D.が表現できるようになり、E.N.がすぐに動き出せたこと、またその動きが次の新しい動きを引き出していることなどである。

また、動きの向き(横や後ろ傾め)、横への移動も2回目は出てきた。

1回目と2回目の表現の違いのもうひとつは、1回目ではモチーフと思えるものが、反復される毎に曖昧になり消えていく傾向にあったのに対し、2回目では反復によってモチーフが明確になっ

ていることである。それは、2回目の運動が全身で行なわれ、その運動の持つ感じを身体を通して味わえるようになったこと、それによって対象に対するイメージがより強くなったことによると考えられる。モチーフの反復は2回目では少しであるがリズムを感じさせてくれる。

以上のことにより、第1回目の即興表現時における学習者の技能は個人差はあるものの「とらえられる」以前の段階、第2回目では、対象を動きのイメージとして「とらえられる」段階であると考えられる。そして、設定した学習目標、「いろいろなものの形や動きを全身でとらえられる」はある程度達成できたと評価できる。

2回目の即興表現からさらに6時間のダンス学習を経ての3回目の表現は、表現時間の延長、全体がひと続きになっている、フレーズができていて、フレーズの反復がある、モチーフを構成する運動の要素が増え多様な組み合わせがある、同類の運動の反復に追い上げがみられる、空間が拡大されているなどの特徴を持っている。

舞踊運動全体については、表現時間が長くなっていることと、それがとぎれることなく続いていることが、2回目までの表現とは大きく異なる点である。そして、静止や運動を徐々にゆっくりすることによる終りの感じが見られることや、最も複雑で変化に富んだ動きを持つモチーフやフレーズが近くに集まって大きな力の山場を創っている個所があるなど、全体をひとつの流れとしてとらえようとしていることがうかがわれる。M.N.では全体がE F Eのまとまりを見せている。

フレーズが全学習者に出ており、力の変化が、アクセントだけでなく、漸強や漸弱として現われていることも3回目の表現の特徴のひとつである。そして、フレーズの単位で動きが反復されておりイメージがより印象づけられている。

フレーズを構成するモチーフについてみると、その種類が増えていること、同類のモチーフでも、構成する運動の要素の変化によって強さや長さの異なるものができたことがあげられる。また、モチーフ自身の中にも、運動が複雑になったことから、反復や他の運動との加算で生じる長さや形、アクセントの違いによって力の流れが起っている。モチーフの変化は、この力の流れに従ってそれを強調したり弱めたりする方向でなされていることがわかる。モチーフ内での漸強には、2回目の表現にはみられなかった、同じ運動がだんだん速く行なわれることによるものがみられた。

運動の要素では、腕を中心とした上体の動きが個性的になったこと、脚を中心とした移動の要素が増えたことがあげられる。特に、移動の要素がよりダイナミックになり、床上に創られる意味を持った形態が現われ、空中に創られる形態¹⁰もさらに拡大したことが注目できる。

以上のような、3回目の舞踊運動の特徴から、学習者の技能は、「変化させながら続けられる」段階であり、全体の流れも感じられるようになったといえる。

3回目の実験をしながら驚いたことは、A.M.が、一緒に踊った男子にじゃまされながらも(図3の点線部分)いつまでも踊り続けていることだった。また、M.N.とE.N. N.D.は、M.N.が木になり他の2人が風になって一緒に踊ったが、3人は相手を見ながら対応して踊っていた。M.N.は、2回目までは上体がほとんど動かない表現だったが、木の役の3回目では上体をフルに使い、また風に揺れているだけでなく風を誘って大きく揺れるという能動的な表現をみせた。そして、最後のフレーズ(E)では、手を振りながら膝を折る動作でアクセントをつくり、そのアクセントの場を徐々に変えながら小気味よいリズムを出していた。E.N.の風も、木にぶち当たるフレーズ(F)と木の回りを大きく回るフレーズ(G)を交互に行ない、その反復を徐々に追い込んでいく表現を行なった。技能的に最も遅れたと思われるN.D.も一緒に踊ることで、風の動きに2つのモチーフ(木に吹

図1 第1回目の即興表現

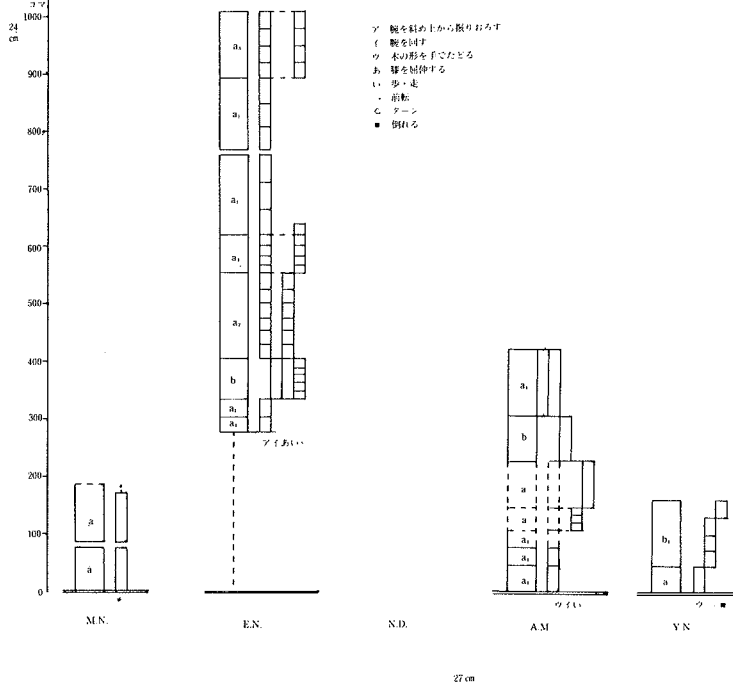
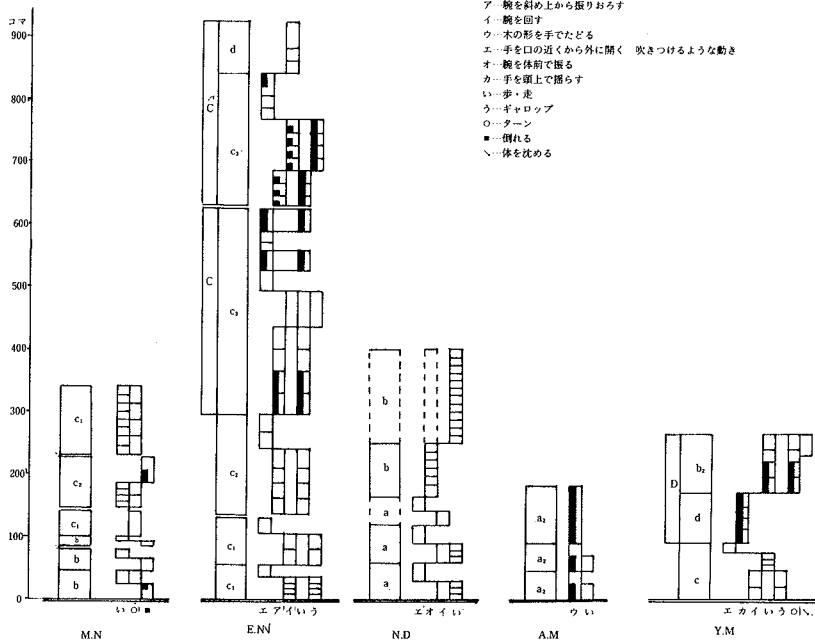
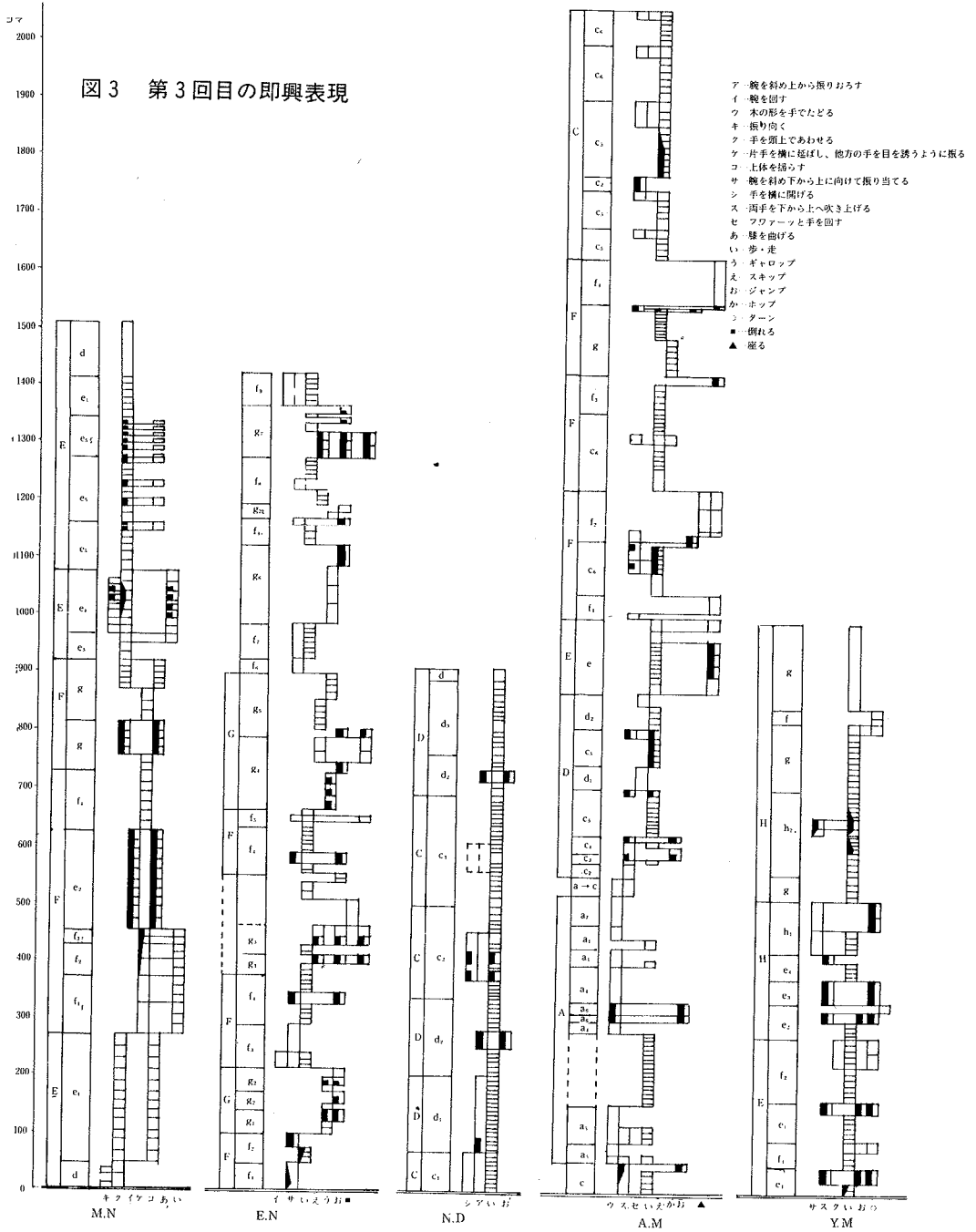


図2 第2回目の即興表現





きつけるd, 木の近くを行ったり来たりするc) をみつけ, アクセントを持った動きで2人に対応して踊っていた。先の2回の実験でもグループの表現をさせたら, もっと早く動きを引き出せたかも知れないと考えられる。Y.N.は1回目の表現から, 短かいが変化のある表現を行っていたが, 3回目にはジャンプターンというダイナミックな動きと, フワッとしたターンを走をはさんで交互に行ない, さらに次の大きなエネルギーの爆発にもっていくというリズムカルな風の表現を行なっている。そして走りながらの漸強や漸弱, 終りの感じも他の誰よりも長い静め方をしている。

また, 表現の中で他人とぶつかりそうになって身をかかわしたのがそのままターンにつながったり, 木を形どる動きがアクセントの変化で, 巻き上げる風の表現に変化したという場面もあった。学習者が動きを感じそこからまた新たな動きのイメージを受けていることがわかる。

V ま と め

3回の即興表現における舞踊運動の特徴を, 全体の構成と, 運動の表現要因に関するものについてとりあげたものが表4である。

表4 3回の即興表現における舞踊運動の特徴

即興表現		1 回 目	2 回 目 (とらえられる段階)	3 回 目 (変化させながら続けられる段階)
全 体	表現時間	短かい	短かい	長い
	構 成	モチーフらしきもの 断続	モチーフ 断続	モチーフ、フレーズ 連続
運 動		日常的	非日常的	非日常的
表 現 要 因	形 態 性	日常の節回 前向き	空中の形態の拡大 前、横、後ろ、斜め向き 左方、右方	床上と空中の形態の拡大 向き、方向に明確な意味
	時 間 性	同じ速さや長さ 繰り返しで動きが曖昧になる (繰り返しできない)	異なる動きによる速さや長さの 違い 繰り返しで動きやイメージが 明確になる モチーフの繰り返し	同一の運動の繰り返しにおける 速さや長さの違い 繰り返しで動きやイメージが 発展する モチーフ、フレーズの繰り返し
	力 性	強弱の差がない	アクセント	アクセント 漸強、漸弱

これらを, 先にあげたリズムの特性と照らしてみると, 第1回目では, リズムの特性は見られず, 2回目では, モチーフの導入, グループ化, 類似性と再帰, アクセントを, 3回目ではさらに(2回目より明確な)持続, 流れをみる事ができる。

VI お わ り に

学習者の1回目の表現は、手話の範囲を越えないものであったかも知れないが、2回目、3回目の表現は明らかに舞踊運動と呼べる媒体を通してのものであった。聴覚障害児にとって言語を使用しない身振りでの表現は、その教育の方向と道を同じくしないのではないかとの疑問もあるが、それでも新しい表現手段によって表現欲求を満ちし内的体験の可能性を上げられるならば意義があるのではないかと考える。そして、県立聾学校の井上先生、風坂先生、大田先生、庄倉先生、塩田先生がこの研究に熱心に協力して下さり、継続してダンス学習指導にとり組んで下さったことを心から感謝したい。

この研究を通して、ダンスの技能がリズム化に向けて発達していることの新たな資料と、身についた技術がどのように舞踊運動に現われるかの具体的な一資料を得ることができた。また、舞踊運動の分析を通して、その形式の特性もある程度明らかにできた。そして、指導の際のポイントともいえるものに多く出会うことができた。今後さらに多くの実践研究の機会を得たいと願っている。

注

- 1 佐分利育代 即興表現にみられるダンスの技能 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第21巻第2号 昭和54年
- 2 佐分利育代 ダンスにおける技術と学習内容に関する一考察 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学 第20巻第2号 昭和53年
- 3 M. N. ドウブラー 舞踊学原論 松本訳 大修館書店 1974年
- 4 S. K. ランガー 感情と形式 大久保他訳 太陽社 昭和50年
L. クラージェス リズムの本質 杉浦訳 みすず書房 1971
徳丸吉彦 親と子の音楽再入門 国土社 1979年
野村良雄 改訂音楽美学 音楽之友社 昭和46年
- 5 鈴木綾子 小学校ダンスの実際指導 学芸図書出版 昭和24年
鈴木は、リトミックの本来の立場からの指導の展開を考えていたと思われるが、指導者の多くはリズムを単に音楽、それも西洋音楽の要素としての一側面とみなすことがほとんどだったと思われる。
- 6 小池敏子 (昭和54年度卒業生、教育学部養護教員養成課程) の卒業研究として実施した。実際には、9時間の貴重な授業時間をいただいたのだが、そのうち2時間は、児童と慣れるための予備授業、2時間は即興表現のテーマについての作文、2時間は即興表現の撮影を行なった。
- 7 小池敏子 聴覚障害児の言語世界とダンスー聴覚障害児の言語におよぼすダンスの影響ー昭和54年度鳥取大学教育学部卒業研究
- 8 昭和54年11月7日に鳥取市民会館で開催されたダンス発表会 (モダンダンス・アピール展 主催 鳥取ダンス愛好会、鳥大ダンス同好会) に聾学校の高等部と中学部の女子が「海の中をのぞいてみれば」の題で創作し参加した。そのダンスを小学部は見学している。
- 9 同上、同じ題で踊ってみさせた。
- 10 松本千代栄 ダンス (表現) 学習指導全書 大修館書店 1980年

(昭和56年5月15日受理)

